佐賀県文化財報告書　第十六集　抜刷

帯隈山神籠石

鏡山猛

第一部

帯隈山神籠石

鏡山猛

目次

Ⅰ 調査の経過……一頁
Ⅱ 遺跡の概要……三頁
Ⅲ 調査の地区……五頁
一、外郭線の調査
二、北門阯
三、郭内の遺構と遺物
Ⅳ 総括……一九頁
一、列石と柵柱
二、土墨
Ⅴ 結語……二四頁

Ⅰ 調査の経過

帯隈山神籠石は佐賀市久保泉町川久保にあり、戦時中の工事によってはじめて知られた史蹟である。背振山麓の一帯は、近年果樹の栽培のため開墾されることが多くなった。これまで帯隈山は全山殆んどが史跡地として指定を受けているため、開拓の対象地域とならなかった。しかし、昭和三十九年度に農業改善事業としての開墾が予想される段階となり、現状変更の申請が提出された。県、市当局は遺構を調査記録して保存対策をたてることとした。調査の重点は、列石線及び郭内の遺構を出来るだけ確認することに置かれた。佐賀市教育委員会では調査委員会を組織して、調査の指導、実施にあたることとなった。委員構成は左の通りである。

福地　亘　佐賀市教育長（委員会代表者）
鏡山　猛　九州大学教授（調査担当責任者）
岡崎　敬　九州大学助教授
小田富士雄　九州大学助手
七田忠志　佐賀県文化財専門委員　神崎高校教諭
三好不二雄　同　佐賀大学教授
城島正祥　同　同
小出憲宗　同
永竹　威　佐賀県文化財専門委員　県文化館長
佐々木　勝　同　県文化館
星野英夫　同
古賀秀男　県社会教育課長
木下之治　県社会教育課　文化財係長
安本雪男　県社会教育課
高島保夫　同
牟田口英治　同

野中九州男　市社会教育課長　　古川文士　市公民館久保泉分館主事
大塚次郎　市社会教育委員会　　山本清吾　市久保泉町
保科恒彰　同　　小川早苗　同
木原逸夫　同

調査の現場に参加した人員は委員の他に左記の通りである。

久保山教善　九州大学考古学研究室　　宮小路賀宏　九州大学考古学研究室
前川威洋　同　　梅崎勝利　九州大学国史研究室
石松好雄　同　　木下巧　佐賀北高校
下条信行　同　　江頭平八
黒野肇　同

作業には地元の人達多数を動員したが、炎暑の労働にもかかわらず多大の協力が得られた。

調査期間は昭和三十九年四月一日より九月三十日に至る間とし、左の段階にわけて実施した。

一、地形図作成　中庭測量KKに発注して帯隈山一帯の二千五百分ノ一地図を作成する。
二、郭内調査　第一次調査及び第二次調査で大略を終る。
三、外郭線の調査　第三次調査で重点的に発掘調査を行なう。
四、補充調査　既往発掘地の実測を完了させる。

第一次調査は昭和三十九年五月十五日より五月三十一日に至る間に実施し、主として郭内の各所にトレンチを設けて遺構の発見につとめた。

第二次調査は昭和三十九年七月二十三日より八月二十八日に至る間に、第一次調査に引きつづき郭内の遺構の検出作業を実施し、県及び市の委員が主として作業にあたった。

第三次調査は八月三十日より九月十八日に至る期間に列石線の調査を行ない、必要な場所は列石、土塁及び柵柱列を発掘して保存措置に備えた。この間、随時調査委員会を佐賀市内或いは現地で開き、調査の打合せ連絡等を行なった。又右の調査期間外にも、しばしば所要の人員は補充調査を行なっている。

Ⅱ 遺跡の概要

帯隈山は背振山系から南に突出する支脈の一端にある標高一七八・一米の山をさしている。佐賀平野を見下す景勝の地にあるが、ここに神籠石のあることが知られたのは昭和十六年であるから比較的新しい。史蹟指定は昭和二十六年である。昭和三十七年文化財保護委員会と県教育委員会では、神籠池の堤防のかたわらに「史蹟帯隈山神籠石」の石柱を建て、説明の標石をそえている。（第1図）その説明の全文は左の通りである。

帯隈山神籠石は小城内の谷に溜池築造中の昭和十六年に発見されたものである。

この神籠石の列石線は標高一七七・三メートルの帯隈山の北側八合目あたりから南下して清兵衛、鳥越山、天童山等の南斜面をとおり、ほぼ馬蹄形に築かれていて、その延長は約二四〇〇メートルにおよんでいる。

用石はすべて花崗岩の切石であって、列石線の北端附近に北門跡らしい遺構が認められているが、水門跡はまだ発見されておらず、列石は埋没したままのところも残っていて、その全貌は明らかにされていない。

神籠石は山丘の頂上附近から中腹にかけて切石をめぐらしている、古墳時代後期の大土木工事の遺跡といわれている。

これには山城説と祭祀説とが古くから論争されているが、朝鮮の山城の影響を受けて築造された遺構と推定されている。

山口、福岡、佐賀の三県に八ヵ所その存在が知られているにすぎない数少ない遺跡であって、学術上極めて価値が高く、文化財保護法によって昭和二十六年六月九日史跡に指定されている。

昭和三十七年十一月三十日

文化財保護委員会
佐賀市教育委員会

第1図　指定標石

昭和三十七年から後、近年の調査によって神籠石の性格は従前よりもかなり明らかになった。その要点は列石内側に土塁があること、外側に柱穴に掘り立てた木柵があることである。これ等の事実は昭和三十八年に行なった武雄市おつぼ山神籠石遺跡の調査から導かれた帰結である。おつぼ山調査の報告書はさきに公刊されているので、研究者は対照して検討されたい。

「おつぼ山神籠石」

昭和四十年三月刊

佐賀県教育委員会
武雄市教育委員会

神籠石は山頂より南斜面を郭内にとり入れている。土塁、石列の並びから考えれば、南水田の地下に水門は埋没しているらしい。水門探索の結果については左の故松尾禎作氏等の報告がある。

佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第十輯所収「帯隈山神籠石」　昭和二十六年刊

次に岩質について一言ふれておこう。

山の南丘陵（桃山、清兵衛山、鳥越山、天童山）の母岩は秩父古生層を構成する緑泥片岩で、表層は風化している。外郭工作の一部はこの岩盤まで掘り下げて行なわれている。帯隈山主峯の岩質は花崗岩で、山中に塊石の露頭がある。列石の大部分はこの石を加工している。ただ花崗岩の原石といえども手近にあるものではないから、相当の距離を運搬して来たことが想像される。加工に手頃のものは、山中よりも、附近の川床に転落したものが択ばれたのではなかろうか。

Ⅲ　調査の地区

今回の調査は

(1)　従来列石線の明らかでない場所を発掘によってたしかめる。

(2) 列石、土塁等の外郭構造を明らかにする。

(3) 北門阯の構造を明らかにする。

(4) 郭内の遺構を検出する。

ことなどに限って行なった。従ってこの調査は神籠石の全面的な究明ではない。前述のような目的のため、期日と経費の関係もあり、調査地区を限定せざるを得なかった。ただし、帯隈山神籠石の全貌はこれまでの諸調査によって明らかにされており、列石線もほぼそのあとを追求することが出来た。史蹟指定の時までには概況実測が行なわれていたが、この調査に際して新たに中庭測量KKに依嘱して製作した航空測量による二千五百分ノ一の基本地図（巻末付載）は自後の調査の企画をたてることに役立った。

神籠石の発掘調査はかって武雄市のおつぼ山に於いて外郭線の全面発掘を企てたことがあり、おつぼ山調査で明らかになった諸点は帯隈山調査の際にも大いに活用された。外郭線の構造は原則的にはおつぼ山と一致する結果となった。予想されたように、神籠石の名のもととなった列石は、土塁の前面基底に一列に並べられた切石である。列石の前には柵柱を建てた柱穴が残っていることが知られた。土塁、列石、木柵が一括されて外郭線を構築するものである。いま調査区のうち外郭線をたどって概要を述べよう。

列石は山の南斜面の幾つかの谷をとり入れてまわっている。南の谷口は三ヵ所あって、そこには水門のあとがあるはずである。従前の幾度かの調査で夫々の位置も確かめられているが、今回は水門の調査までは出来なかった。水門阯は帯隈山ではすべて水田や溜池の堤防下に埋没していて露出するものがない。蜜柑園の開墾がなされても、遺跡が破壊される懼のない所は今回の調査の対象から省いた。

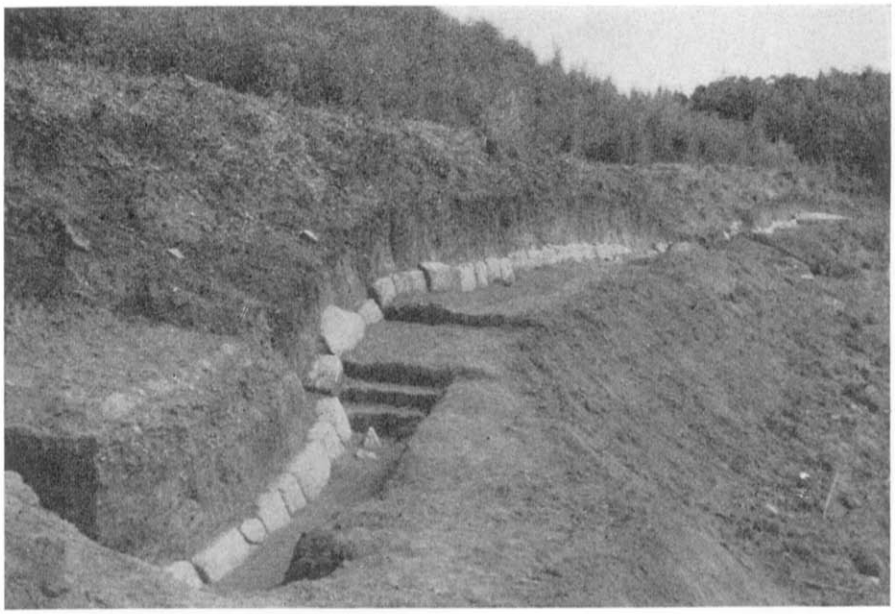
一、外郭線の調査

外郭線の調査は次の四ヵ所を重点として行なった。

第一区　神籠石の西辺（地形図記号A—B間）

この辺は列石中従来あまり明確にされなかった所である。近年開墾によって列石の一部があらわれたため、発掘によって外郭線をたしかめることが出来た。この附近の地形は以前は雑木のなかにあって大勢を観察することが出来なかったが、樹木が払われてみると明瞭な土塁が見られる。（第2図）現在は竹林が背景となって連っているが、おつぼ山の例のように、土塁のあとさえ明瞭であれば、列石は必らずその外側の基底部に列んでいる。調査列線のほぼ中央部で、列石の一部が約二十米に亘って地すべりのため南側にずり落ちていた。（第3図）この成列のままずり落ちた列石の左右も若干下方に移動した疑があるが、地形図には復元した線も示すことにした。列石の前面にある柱穴をたしかめ、その間隔が三米（一〇尺）であることを知った。なお、柱穴の中間には柱に沿えられたと思われる塊石がみられた。この事実は帯隈山神籠石全般を通じてみられる所であるから、後にまとめて解説する。調査区の西端は、小さな谷口になっているので、列

第2図　第1調査区の土塁（調査前）

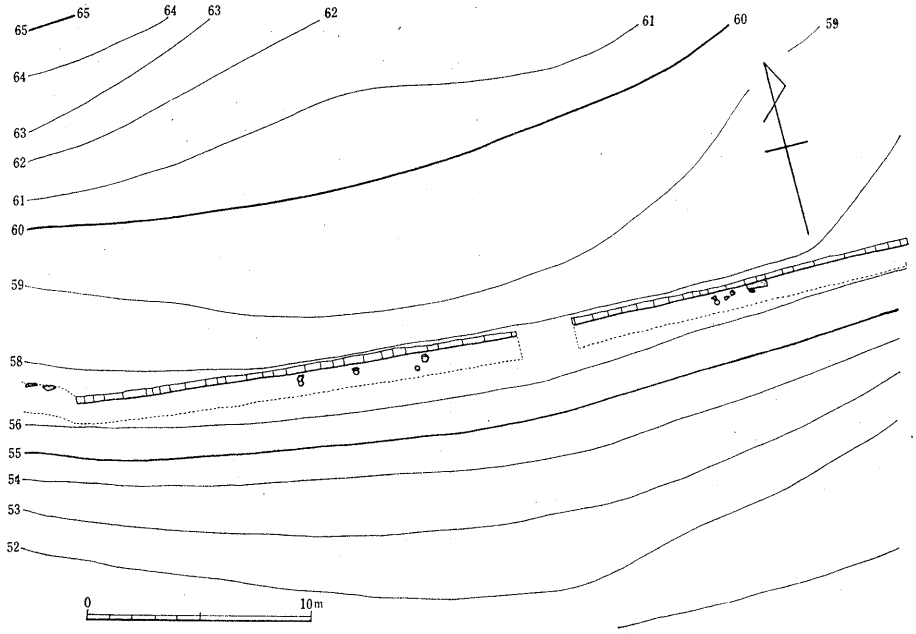


第3図　第1調査区の土塁

石の間を少しあけて内側に大小の塊石を詰め、水湿を排除する工作がされていた。(第18図)平時は水の流れる所ではないが、大雨の時はこの谷を流れるので、土塁の崩壊を防ぐためこのような塊石が使用されたものと思われる。

第二区　清兵衛山南側の列石線(地形図記号C—D間)

清兵衛山は前記第一調査区から南にあたって、神籠石列線の西南隅を占める位置にある。東西方向に鞍部があって東端の標高七二・一一米の丘陵を大清兵衛とよび、標高六〇・三の尾根つづきを中清兵衛、西端の四三・七米の尾根を小清兵衛と俗称している。列石は中清兵衛の西側を南下して東に廻り、大清兵衛の南スロープを走っている。やはり土塁状の土盛が認められたので、その一部を切断して堆積土層を調べた。(第16図)列石の前面に三米(一〇尺)間隔の柱穴が並んでいることは此処でも同様であったが、その一部で岩盤の被覆土のうすい所では岩盤を所要の大きさに掘り切っていることがたしかめられた。西端部一三米以上の間は列石が取去られて、裏ごめの石が列をなして残って

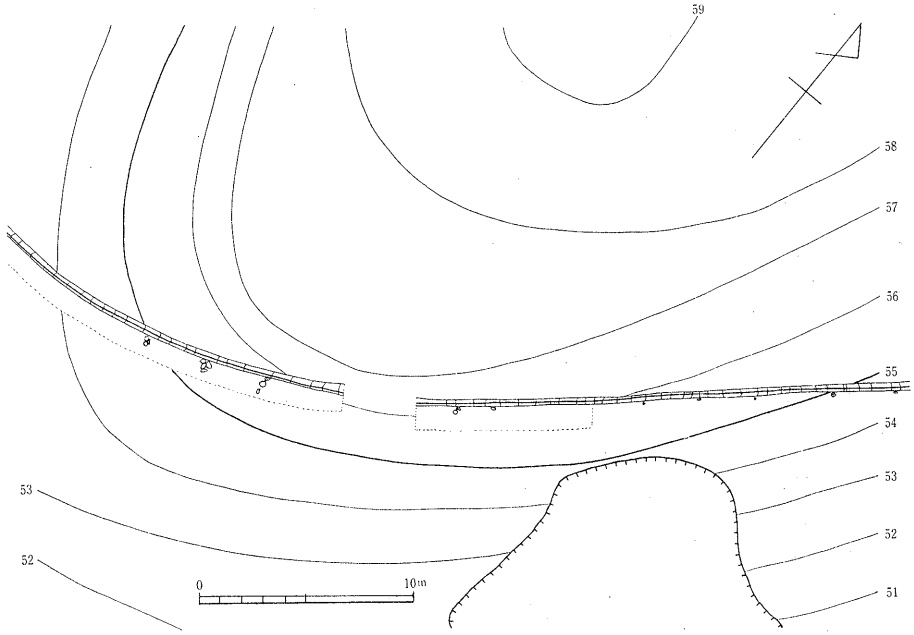


第４図　第２区外郭線（清兵衛山南麓）

いる。この部分の列石切石が取られたのは何時かわからぬが、道路に近く引出しに便利であるから石垣などに利用されたのであろう。石を抜いた跡は明瞭である。この附近は土塁前面の傾斜が急であって、大野、基肄城などの朝鮮式山城の土塁の前面の急傾斜面と相似た形態を示している。自然地形を利用した所もあるが、一部は外部前面を急崖とする目的で、自然の傾斜地を削り落した所もあるように見える。防塞的効果を意図した工作である。

第三区　神籠石南辺（地形図記号E―F間）

鳥越山の南辺で丘陵のすそ近くを弧状に走る石列がある。列石の後背地が土塁であるが、土砂の流出や堆積によって土塁の形が認め難い所もある。しかし、調査区東端の道路の切り割に、当初から明瞭な堆土による土塁（版築）のあとを認めることが出来た。今調査にあたって断面を整理し、列石、柱穴列との関係を検討した。この地区は雑木が焼き払われていたので列石の発掘作業は困難ではなかった。この地区では柱痕の上縁に塊石が添えられて

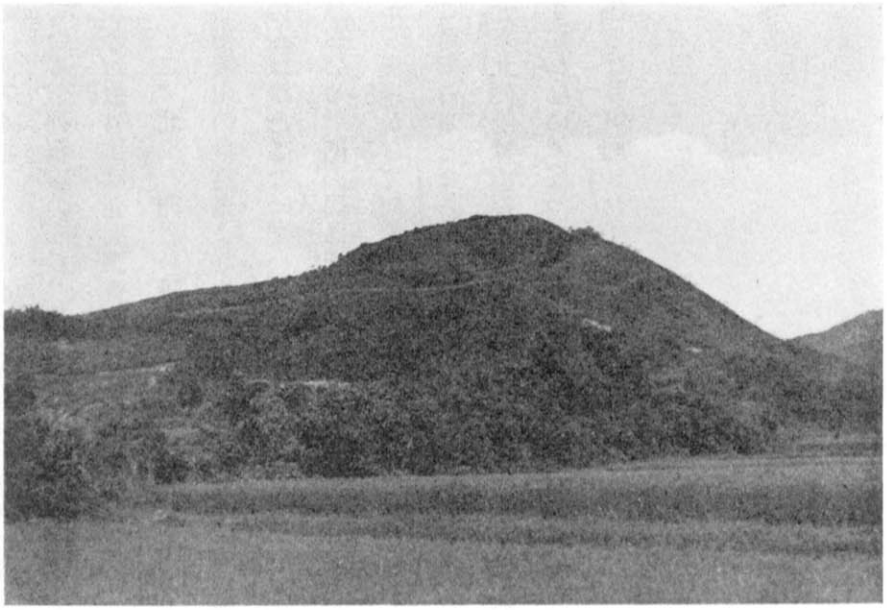


第5図　第3区外郭線（長尾山南麓）

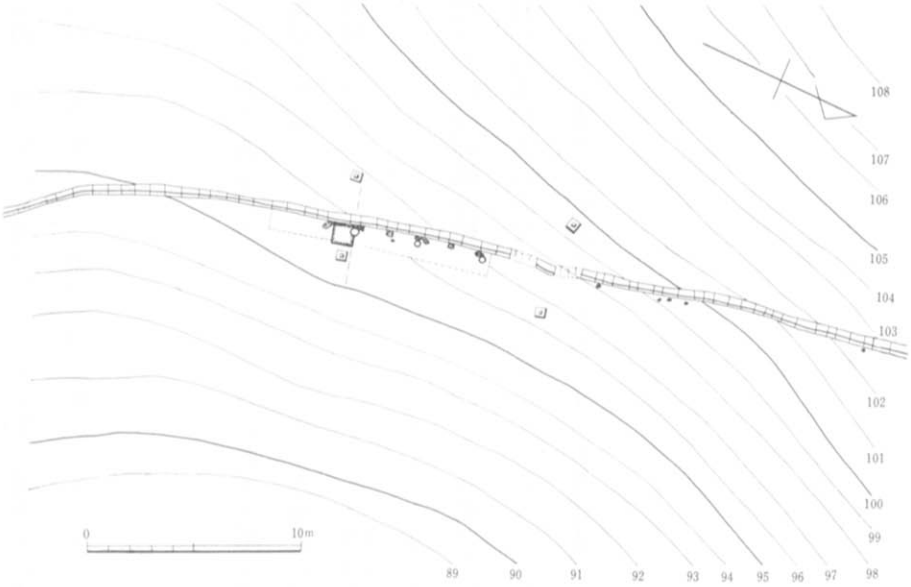
いるのが注意された。第四区に於いても同様であるがその意味については次節にまとめて考察しよう。

第四区　神籠石東辺（地形図記号G—H間）

神籠石列石の東辺は天童山より帯隈山頂に向って登り坂になる地形である。調査区は帯隈山頂から東南に走る尾根の外側（東側）にあたって列石を調べることとした。森林伐採のため、眺望もよく東側の谷をへだてた丘の上からは列石線の延長がよく見渡される。（第4図）土塁は所によっては尾根を利用したため、高低、広狭一定しない所が多い。七世紀中葉に築城された西日本山城に共通する地形利用である。多くの場合、尾根から緩やかな傾斜地があり少し降って急傾斜になる。その傾斜変換線が列石線（柵柱列）にえらばれる。この地区では柱穴列と列石との関係を調べるため、一部の発掘を行なったが、柱穴の添え石がかなりよく残っており、新しい観察資料となった。調査区の北部は列石は露出していないが、地形の大勢から察してその位置が明らかに認知される所であ



第 6 図　第 4 区 の 遠 望　　東方より

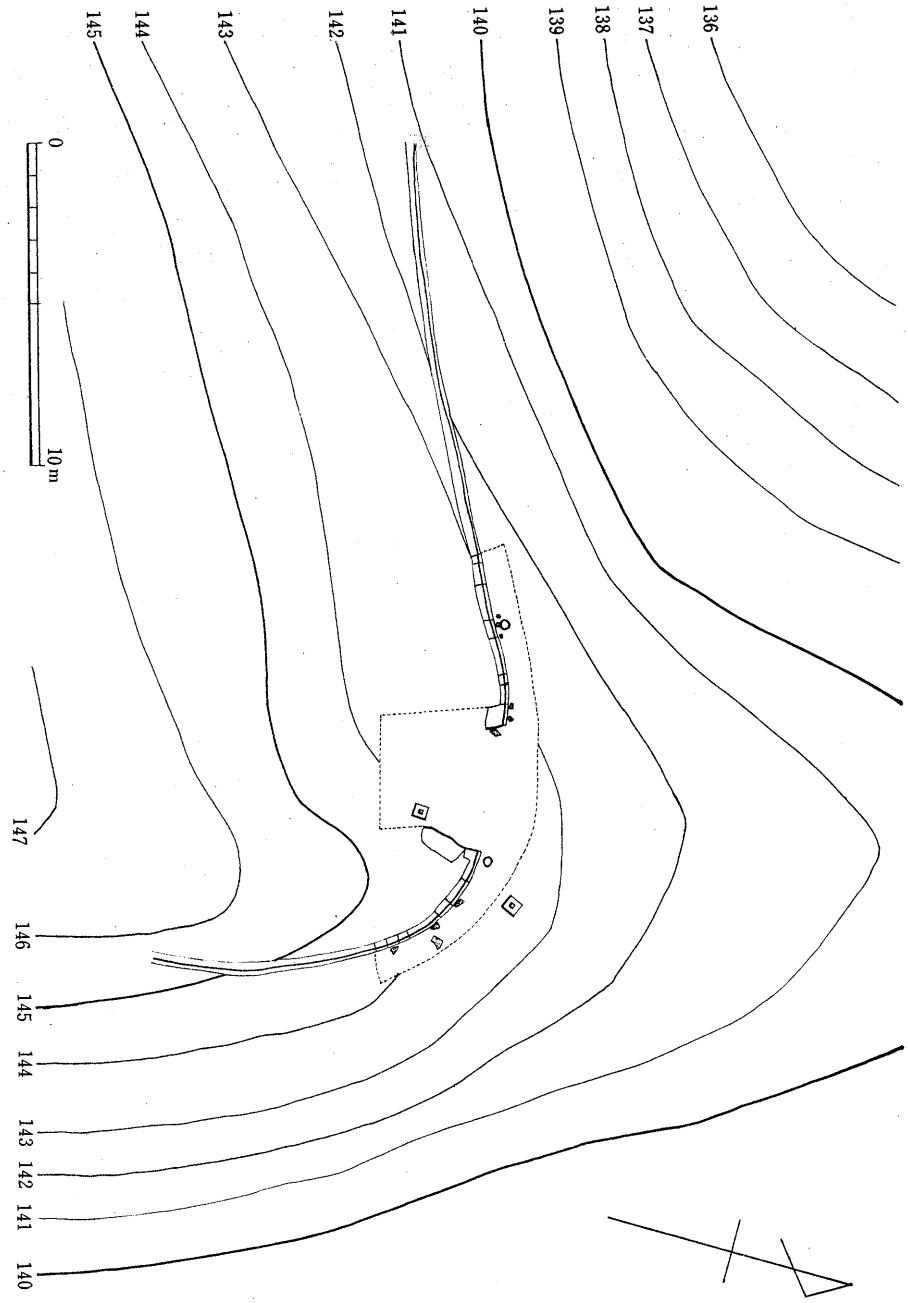


第 7 図　第 4 区 外 郭 線

る。列石を辿って北に進めば最高地点北門に達する。北門阯より西に向う列石は南に降って前記第一調査区に連っている。列石線のうち、北―西辺は今回は開墾予定地ではなかったので、北門阯を調査し、現状から列石線をたしかめた以外には発掘調査は行なわなかった。

二、北　門　阯（第8図、図版第九―1・2）

帯隈山の最高峯よりやや北に降った所に北門阯と称する列石の切れ目がある。門阯両側の石は比較的大形で東側の石は鍵形となっている。その石に接して荒割の巨石があって東壁を形成している。これに対面する西側の石は欠けている。門の幅は列石の切れ目をはかると約三・五米、前面約四米の間は柵柱がなかったようである。門の入口から奥にかけて何等かの施設があるのではないかと探索したが、ゆるやかに登る地盤には柱痕も石列もなかった。これでみるとまことに簡単な門で、若し扉でもあるとすると、門阯入口の両側の柵柱にとりつけるより他はない。元来北門阯は山頂に近く、防禦の態勢としては裏手になって、且つ高所にあるので、特別な防策とならなかったかも知れない。反って門の前庭とおぼしい平坦地が正面に突出している。北門阯の調査は八月二十五日小田委員が主任となり実施した。


136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
0
10m
147
146
145
144
143
142
141
140

第 8 図　北　　門　　阯

三、郭内の遺構と遺物

神籠石郭内の施設については、おつぼ山調査でも気をつけたが、思わしい結果は得られなかった。帯隈山は調査区域が広範囲に亘るから期待をかけたが、予期したような成果はなかった。或る場所に柱穴群があり、土器片など若干を採集したが、神籠石の年代のものか疑問である。このような高地に住居を営んだ事態は尋常でないようにも思えるが、憶測をまじえず報告しておこう。郭内での発掘面積は、さまで広くはなかったが、一応建物の建ちそうな比較的平坦地を求めてトレンチを設定した。トレンチのその位置は地形図に書き入れ、試掘の広さと出土物については左頁の付表に示すとおりである。

附表によって五十八ヶ所のトレンチ掘開によって得られた資料は土器片の他はきわめて少ないことが知られる。そのなかで数ヶ所で土師器片が採集され柱穴らしい遺構も出ている。土師器の年代は後述の如く古墳期の初頭にさかのぼるが、小残片は各所から出ている。しかし直接住居阯に関係がありそうなのは限られた数である。トレンチ番号で示すと

A——5、7 鳥越溜池の北辺地区で土師器の破片がかなりかたまって出土した場所が二ヶ所ある。ゆるやかに傾斜しているが、床面らしい地盤もあって生活の場所と思われる。

B——19 平坦地に土器が小数散乱し、焼土塊があり、鉄片が出る程度で、住居阯としては限界が明確でない。

B——26 柱穴と思われるものが約二十度の傾斜地に認められた。しかし浅い穴であるから、堅牢な建物とも思われない。柱穴の配置も一棟分の建物としてまとめるには資料不足である。（第9～10図）

E——1 六本の柱穴が知られた。幅二米のトレンチでは全貌を知ることが出来ないが、柱穴の径は二〇～二五

付表　郭内トレンチ調査表

A　地　区		
No.	幅×長さ(m)	備　考
1	2×8	
2	2×10	
3	2×10	土器片
4	2×12	
5	4×9	住居阯、土器片
6	2×9	
7	2×10	住居阯、土器片
8	2×8	
9	2×10	
10	2×10	
11	2.3×2.9	土器片2
12	2×6	

B　地　区		
No.	幅×長さ(m)	備　考
1	2×10	
2	2×12	
3	2×12	
4	2×6	土器片8
5	3×5	土器片3
6	2×2	土器片6
7	2×3	
8	2×3	
9	2×5	
10	2×3	
11	2×3	
12	1×5	
13	1×5	
14	2×10	
15	2×10	
16	2×10	
17	2×10	
18	2×10	
19	2×10(3×6.4)	土器片、鉄片
20	2×10	
21	2×10	
22	2×10	
23	2×10	土器片3
24	2×10	
25	2×10(+2×5.4)	
26	2×10	柱穴
27	2×10	
28	2×10	

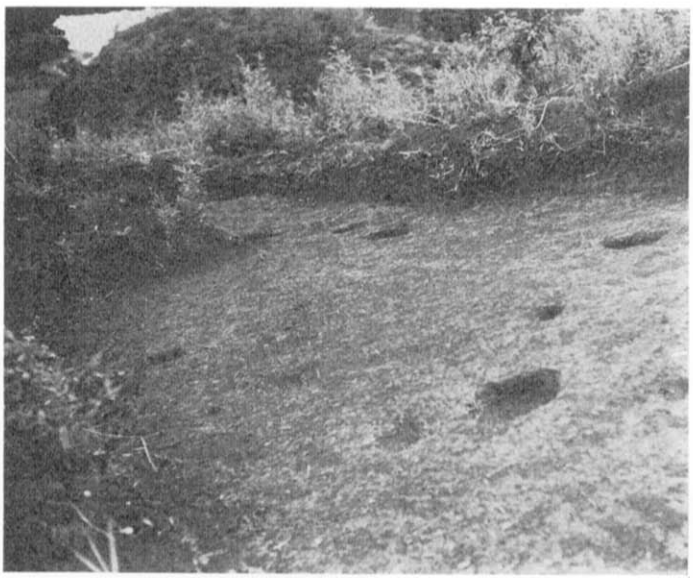
C　地　区		
No.	幅×長さ(m)	備　考
1	2×12	
2	2×5	
3	2×10	
4	2×7	
5	2×7	
6	2×10	
7	2×8	
8	2×5	

D　地　区		
No.	幅×長さ(m)	備　考
1	2×10	
2	2×10	ポイント1
3	2×5	
4	2×3	

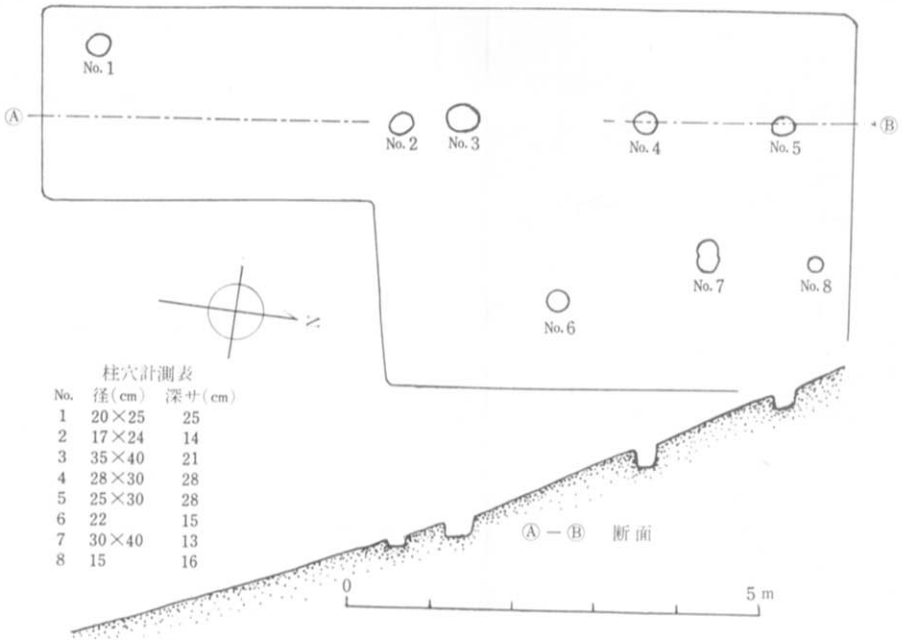
E　地　区		
No.	幅×長さ(m)	備　考
1	2×10	柱穴
2	2×9	
3	2×5+2×5	土器片3
4	2×10	土器片2

F　地　区		
No.	幅×長さ(m)	備　考
1	2×10	
2	2×10	
3	2×3	

備考　便宜上郭内をA区よりF区まで6区に分けた。
区画線は地形図参照のこと。



第 9 図　柱　　穴　　群（B区26号）



柱穴計測表

No.	径(cm)	深サ(cm)
1	20×25	25
2	17×24	14
3	35×40	21
4	28×30	28
5	25×30	28
6	22	15
7	30×40	13
8	15	16

第 10 図　B 区 26 号トレンチ柱穴配置図

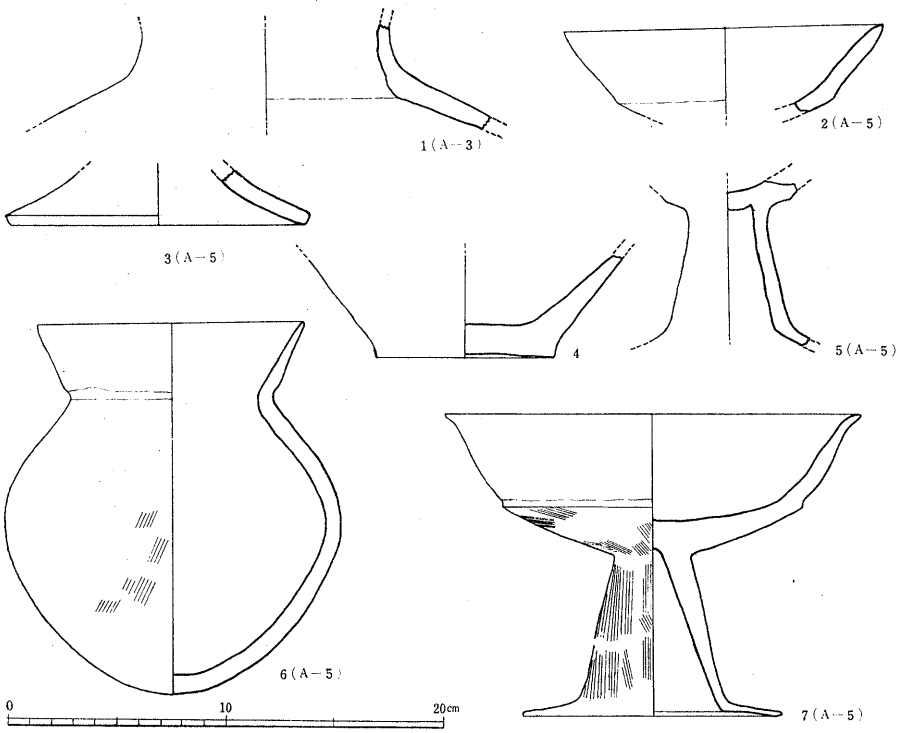
糎、深さ二〇～三〇糎程度である。土師器残片二片が採集されただけである。

郭内出土の土器（第11～13図）

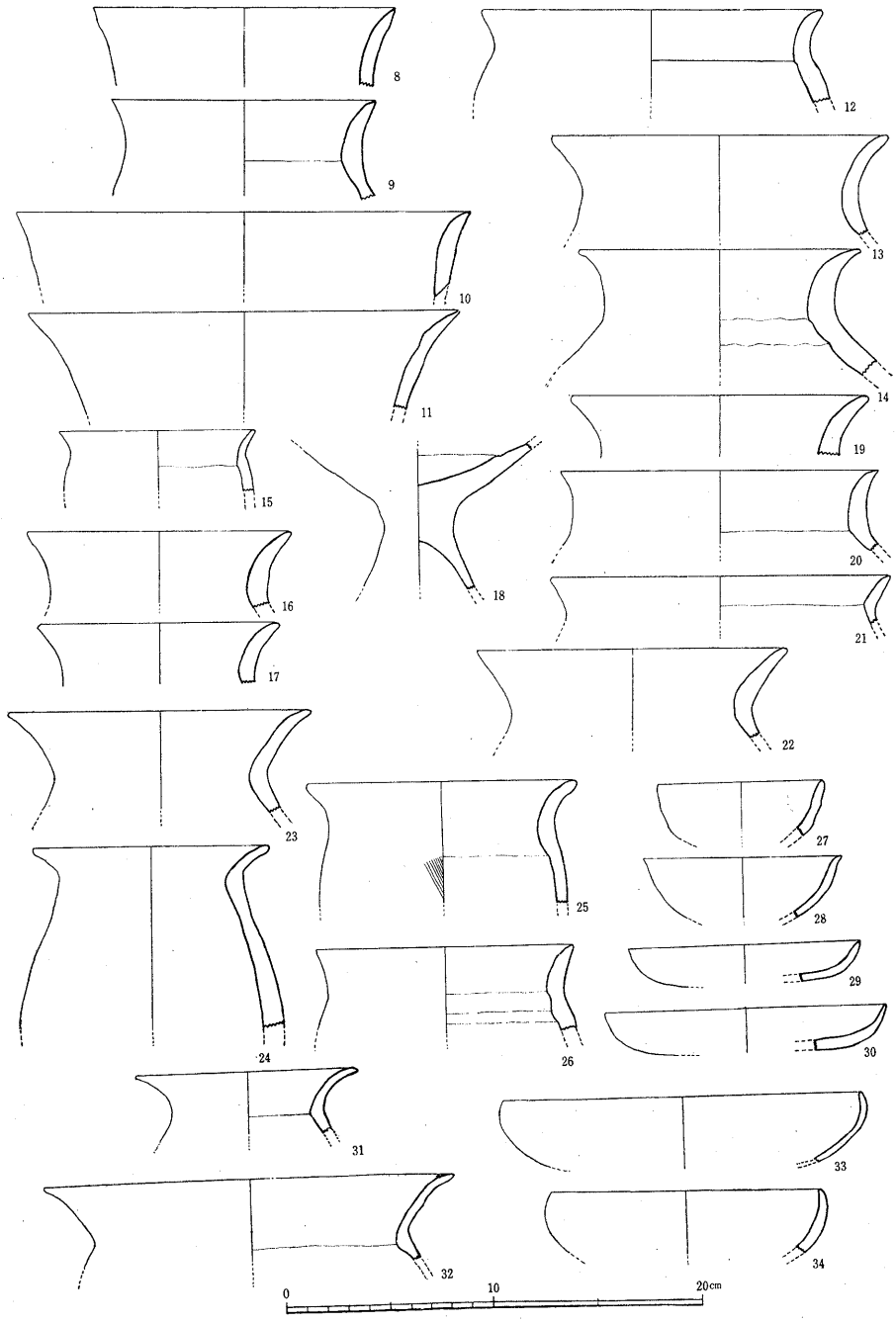
発掘された土器の総数はかなりの量にのぼるが大部分は特徴をとどめない小破片であるので、時代判定に必要な特徴をそなえている資料を選んで解説する。

弥生式土器　石英粒を混じた平底壷形(4)と弥生終末期にみられる脚付鉢形の脚部と思われるもの(3)がある。

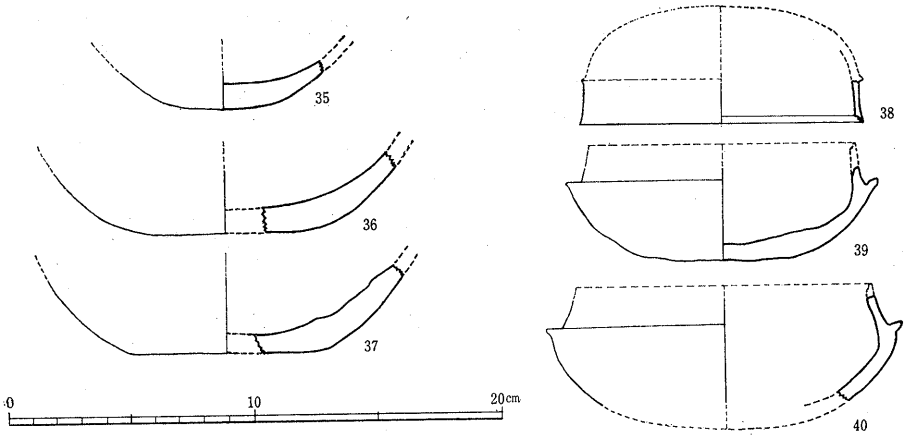
土師器　壷、甕、高坏、皿、盌などの種類があり、出土土器のうちでも土師器の破片がもっとも多くを占めている。複元してほぼ完形となるものはA―5トレンチ出土の壷(6)と高坏(7)の二個だけである。淡黄色の軟質焼成で、刷毛目調整のうえ更に研磨している。器形にみる特徴は和泉式の直前段階あたりに比定でき、



第11図　郭内出土土器（その一）



第 12 図　郭内出土土器（その二）…A－7 トレンチ



第 13 図　郭内出土土器（その三）…A―トトレンチ

四世紀代にまでのぼるであろう。大部分の土師器はこの時期に属するものと思われるが、一部には六世紀代に下るものも含まれている。一般に焼成は軟質でもろいが、壷や皿、盌の類には赤褐色のよく研磨された薄手精製のものがみられる。いずれも神籠石の遺構と直接関連あるものでないので詳説をさけて実測図をかかげるにとどめる。

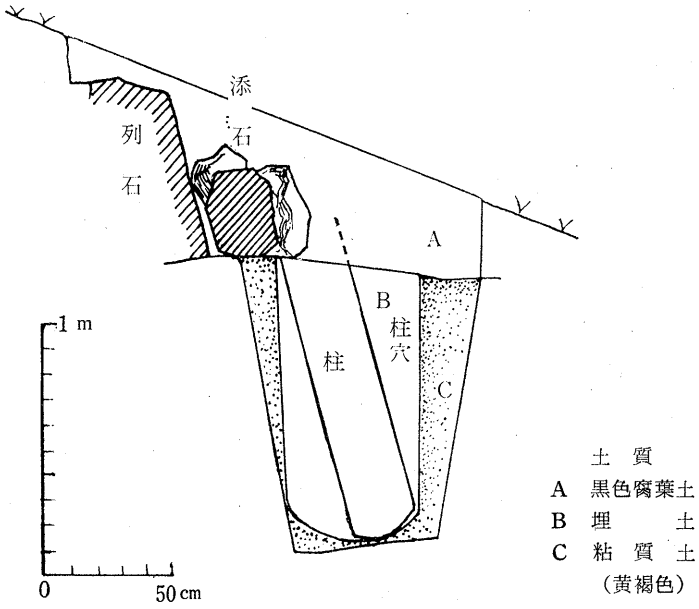
須恵器　古式の蓋坏数点がある。(38～40)第Ⅱ様式の特徴をもつもので、六世紀前半代に比定されよう。土師器の一部にこの時期に相当するものがあるので共伴資料として考えてよいであろう。（小田）

Ⅳ　総　括

一、列石と柵柱

列石前の柱穴はおつぼ山の例と同様で、まず柱径よりも大形の方形の穴を掘っている。第四区で調べた柱穴の例によると(第14図) 径五〇糎余の方形の穴を深さ一・二米程度掘り下げている。柱穴はほぼ垂直に掘り下げているが、この穴に入れた円柱の(径二六糎)あとは斜になっている。その角度は約一二度で、柱根の下端は穴の外壁につけ上端は内壁面につ

けている。この柱の傾は列石(切石)の正面の斜度(約一〇度)におおむね一致している。列石の正面は平に加工し、他の例と同様に据りのよいように根張り(下端が前に出る)の状態が見られる。特に興味ある事実は列石と柱の間に小形の石を一個乃至数個そえていることである。この控石のようなものをこれまで添え石と呼んできたが、調査ケ所では、縦長の石を用いた場合は、列石と柱の間にかませるような状態になる。このような添石もまた柱の傾と同じ傾斜に置かれた事を示している。若しこの石が柱根を固定させる役目をなしていたとすれば、少くとも添え石の大部分は土中に埋没させた方がより効果がある。とすれば、僅か六〇糎余りの高さしかない列石正面の大半は土中にかくれていたことになる。このような状態を想像すれば、列石の外観はその上縁を僅かにのぞかせて柵柱の止め石の役目を果していたことになる。しかしながら切石の加工の面から見ると、正面の石は面を平らかにととの



第14図　列石と柵柱断面図　第4調査区

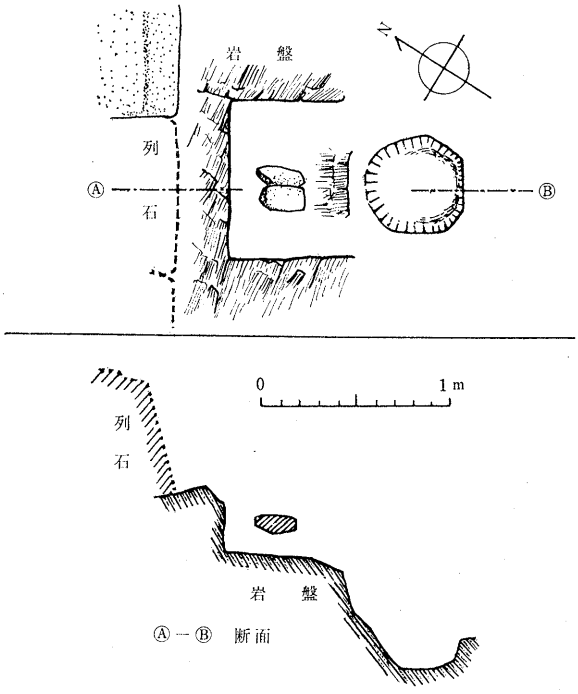
え、上縁にも面取りが見られる。このような一見矛盾した効用と工作の両面を如何に解釈するかが今後の問題として残される。これまで柱とよんだものは、柵柱であることは想像に難くないが、柱穴の中間に添え石が置かれている。帯隈山では、柱穴の心心間隔は約三米で、その中点すなわち一・五米間隔に柱穴に添えられたと同じような添え石がある。添え石の形状傾きからみると、柱穴に立てられた柵柱と地上に立てられた柵柱が同一列に並ぶことになる。私はさきにおつぼ山の神籠列石の一部に上面の平かな礎石状のものが等間隔に置かれていることを知って、親柱の間にやや小形の子柱が列んでいたであろうと想像した。おつぼ山では親柱は内傾しているが、子柱は垂直であるし、又親柱よりも列石に接近しているので、或る高さで交叉する構造を考えた。帯隈山では少し事情が違っている。添え石の状態から考えれば、地面に建てられた柱も穴に根を入れた柱も大小があるようには見えない。一律に約一・五米の等間に内傾する柵柱が一列に並ぶこととなる。このような柱列に横木をわたすことは当然であろうが、立柱を補強するため外傾する支柱、腕木、添木があったかどうか今後検討を要する問題である。立柱の根固めの石は列石を基底面まで掘り下げると、所によっては夫々の頭を露呈させた数個の石が、柱根をとりまいた状態に置かれている場合もあるし、(図版第七) 柱と列石の間にかませる状態の所もある。前者の場合、添石は土中に置かれなければ役に立たないし、又そのような状態でなかったら原状のまま残ることもあり得ない。柵柱の大きさは柱穴のなかの痕跡からみて直径二五糎乃至四〇糎程度のものであったことが知られる。柵柱の間隔は前から述べているように三米、その間の立柱を入れると一・五米となる。三米間隔はおつぼ山の報告で論じたように旧尺の一〇尺であるが、此処では少数の柱間で計測したがかなりの出入りがみられる。けれども長い距離の累計になるほど平均値が一〇尺に近くなる事実が知られる。いま第二区と第三区の例をあげると次の表のごとくなる。

第2区（西より）

実測値m	間　数
2.6	1
2.7	1
13.7	4
計　19.0	6
平均　3.1	1

第3区（西より）

実測値m	間　数
2.9	1
3.	1
9.2	3
14.2	5
3.6	1
3.	1
計　35.9	12
平均　3	1

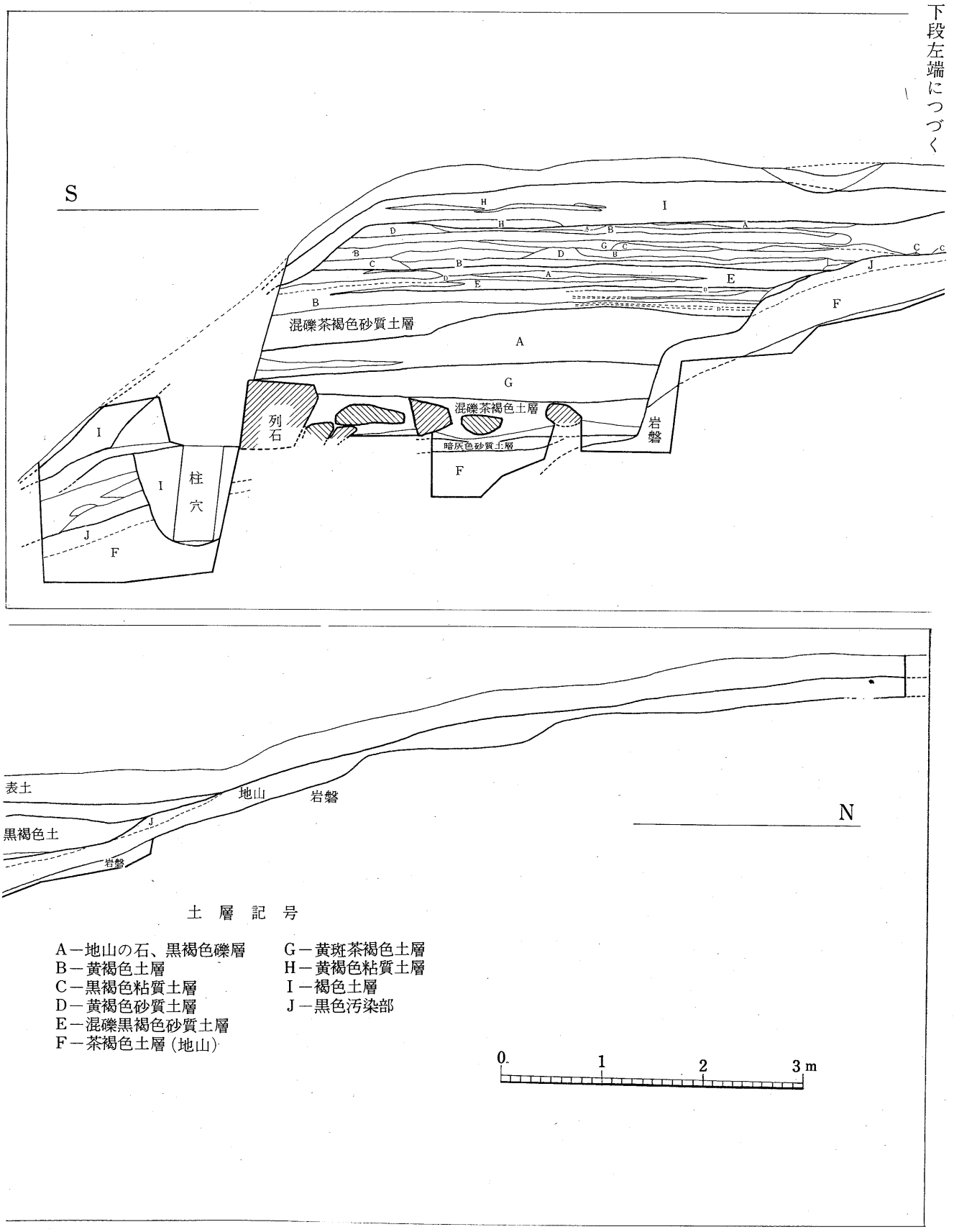


第15図　岩盤に掘り込んだ柱穴

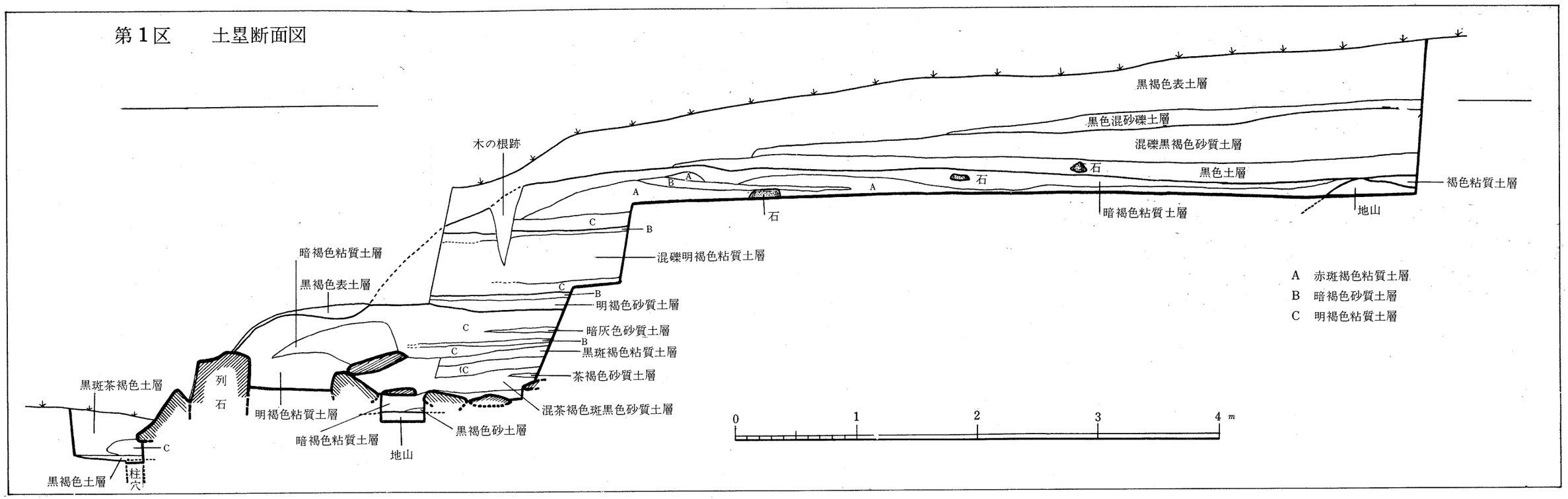
両者の柱間の平均値は三・〇五米＝一〇・〇七尺となり、曲尺一〇尺に近い。大宰府に使用されたと思われる唐尺の平均値は〇・九七―〇・九八であるから、正確な数値を知るには今少し資料を集めた上で尺度が丈量にどのように使用されかを検討したい。

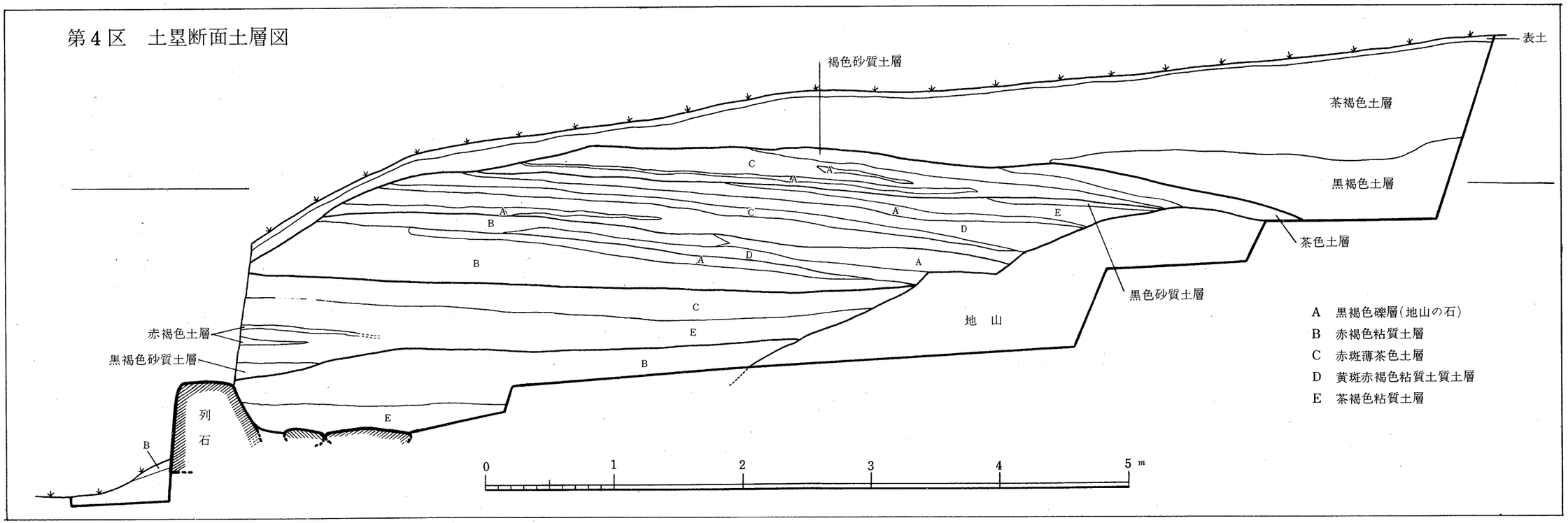
二、土　塁

おつぼ山の調査以来、神籠石の外郭は土塁と外柵に重点が置かれることになったが、この帯隈山では土塁の状況はまことによく保存されている。これまで列石線の明確でなかった所は、密林や藪に蔽われて地貌が外からみてわからない所であった。近年これ等の雑木や竹の林が伐採されると土塁のあとを容易に認知する事が出来た。土塁を断ち切ってみると、土堆を重ねたいわゆる版築の状態が知られるのであるが、流土堆積のため原状は発掘によらないと捉え難い所もある。私どもは三カ所に土塁の断面をつくって観察した。



第16図　第２区土塁断面

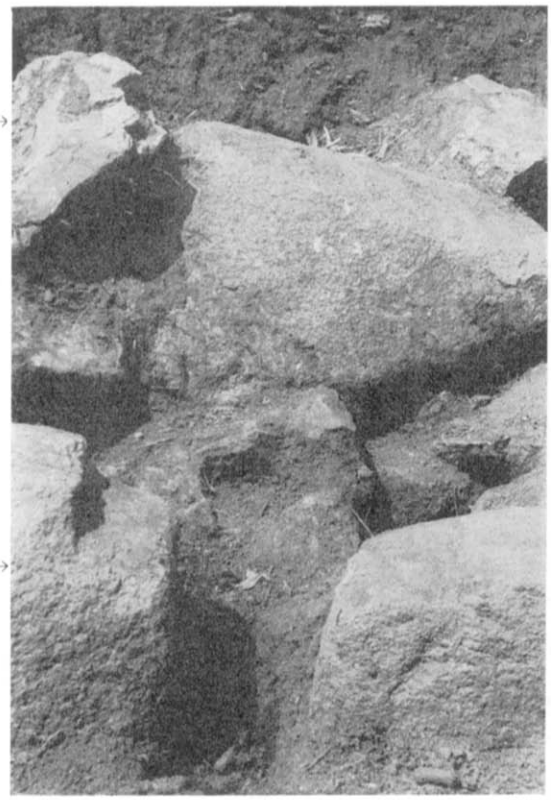




第17図　第1．2区土塁断面図

その一は第二区の中央部で（Bトレンチ）丘陵の上面をやや降った緩傾斜の部分に盛り土をして固めたものである。（第16図）版築前面の傾斜は約一五度で、柱や列石の傾きと近似している。土塁前面の高さは列石の基底から二・六米で、列石の裏どめ及び土堆の基部には花崗岩やこの附近の地盤をなす緑泥片岩の割石が混じて使用されている。土塁の幅は上面が水平に近いので、後背地点を細かにみわけることが出来ないが盛り土の幅は約一〇米に及んでいる。

次の断面は第三区道路わきの切りわりである。（第17図下段）ここでも同様の規格である。堆土は水平におかれているが頂部はゆるやかに盛り上りをみせている。土塁の正面でも、水平に重った土層の縞文がよくみえている。（図版第四下段）土塁の幅約九米は旧尺三〇尺でおつぼ山に一致している。土層の後背地には二～三米幅の平坦面があって俗に「車道」（くるまみち）と称しているが、外郭線にそって交通するには、この平坦地が通路に利用されたことは想像に難くない。



第18図　第1調査区の小水門

その三は第一区中央より西寄りの所（Aトレンチ）を切断したが、基本的には同一構造である。（第17図上段）

小水門址

土塁は郭内への通路及び水門によって切ら

るが、今回の調査の対象となった列石の切れ目は北門阯と第一区の谷口にすぎない。北門阯については既述の部分につけ加える所はないが、第一区の谷口については少し説明を加えておこう。ここは列石の切れ目といっても僅か二〇糎程度の間隙であるが、土墨の骨に大石を入れ、更に扁平な小石を入れている。（第18図）このような施設は谷水の処理を考えたもので、詰め石の上の堆土そのものも現状でははっきりしない。朝鮮式山城では小さな谷口をふさぐのにやはり割石込めの方法をとっているが、此処でも規模は大きくなくとも同一の原理に基いている。土墨の崩壊を防ぐ方策であろうが、基石となっている列石には、左右相照の面取りを行なっている。切り石の加工には細心の配慮をみせている。

最後に第二区の岩盤に掘り込まれた柵柱穴の特例について述べておこう。（第15図、図版第八―2）此処では方形（上段）と円形（下段）の掘り込みがみられる。思うに方形の穴は下端を岩盤に掘り下げることが出来ず、更に降った位置に穴を掘ったのではなかろうか。二段がまえの穴の上段には、土を盛って柱をすえたような敷石が二枚残っていた。下段の穴はその柱の支えとなるような斜の支柱が想定される。

V 結　語

この調査は開墾事業の申請に対応して行なったものであるから、純学術的な見地からみればなお調査すべき重要な場所が残されている。しかし、当面の開墾申請地にある遺構は充分尊重して保存する要望を委員会としては提出しておいた。神籠石遺跡は外郭工作と郭内構造が一諸になって構成されるので、遺構のない地域といえども地貌の

変ることは好ましくない。今回の郭内調査に際しては遺構の探索に務めたが、直接資料は得られなかった。ただし、遺物の出土した地点は古墳の破壊されたあとなどと共に現状変更のない様に指示した。なお、外郭線は従来の列石線指定でなく、土塁柵柱列をふくめ充分のゆとりある保存の方法を要望した。

このような行政的配慮と共に、学術的な調査が、より多くの努力を要した。調査員、補助員、作業員共同して現場作業を行なって来たが、長期間に亘ったため全員揃って同一作業に従事することは出来なかった。このため、しばしば会合を開き、連繋を密にして協同の実をあげるようにした。

おつぼ山に引きつづいての帯隈山の調査は、色々の点で前の調査が役に立った。そのため調査の困難さは各人にわかっていたと思うが、当初から見通しの明るい調査であった。条件としては外からの必要にせまられて遂行されたのであるが、調査には地元の理解と協力が得られた。色々の点で新しい知見を得ることは出来たが、依然として明らかに出来ない重要な問題も残っている。個々の問題については本文中に指摘しているのでくり返さないが、史蹟に指定された神籠石は全国で八ヵ所に過ぎないので、今後は比較資料の蒐集検討に俟つ所が多い。

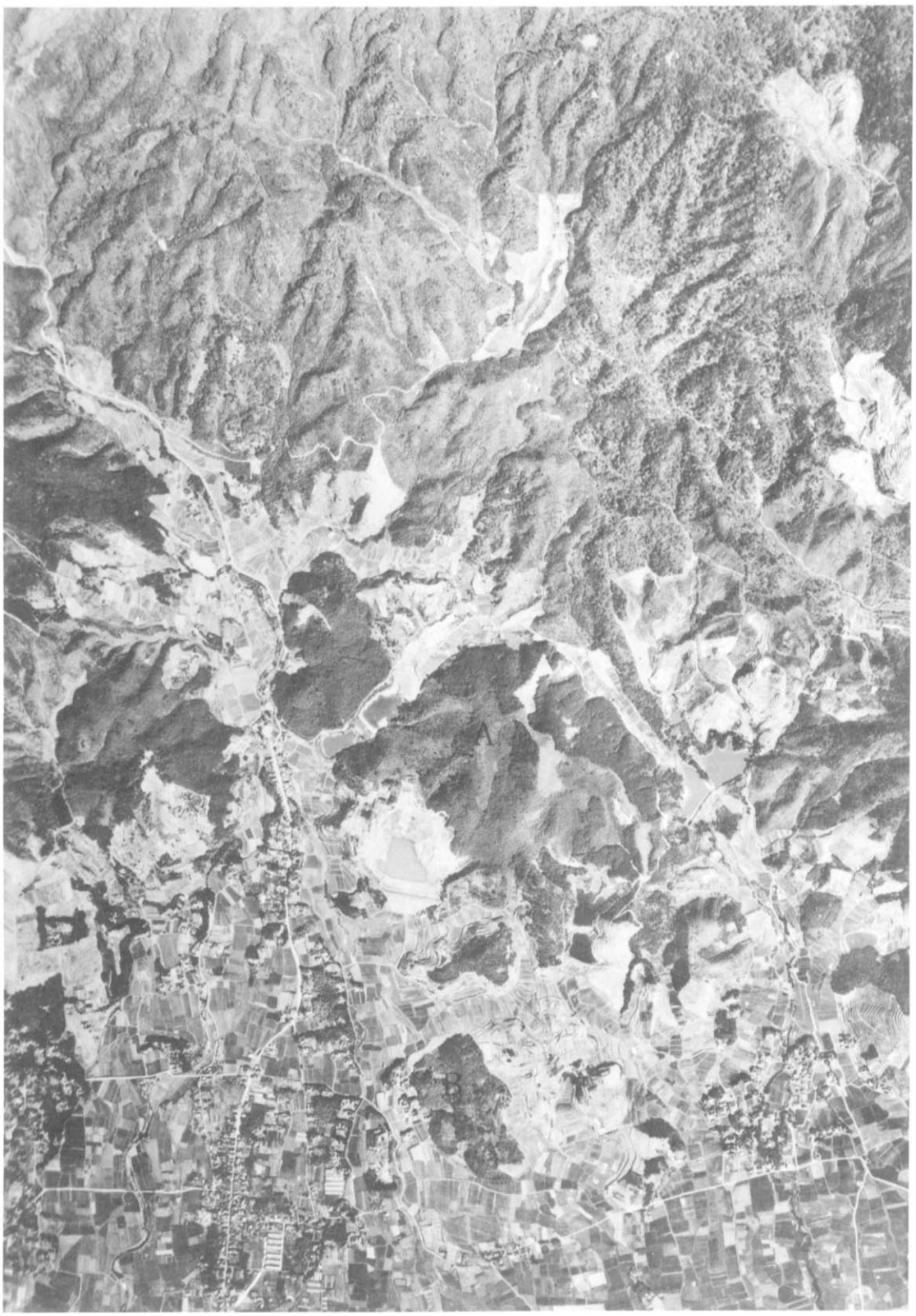
付記

帯隈山神籠石の報告書は鏡山委員が執筆したが、原稿の一部（Ⅲ―三、郭内の遺構と遺物のうち、郭内出土の土器の項）は小田富士雄の執筆である。又付図作製にあたっては左の諸君が分担して浄書した。

小田富士雄　前川威洋　下条信行　橋口達也
塩谷勝利　高倉洋彰　上田和子

図　　版

図版第一　帯隈山附近航空写真



A　帯隈山　　B　熊本山

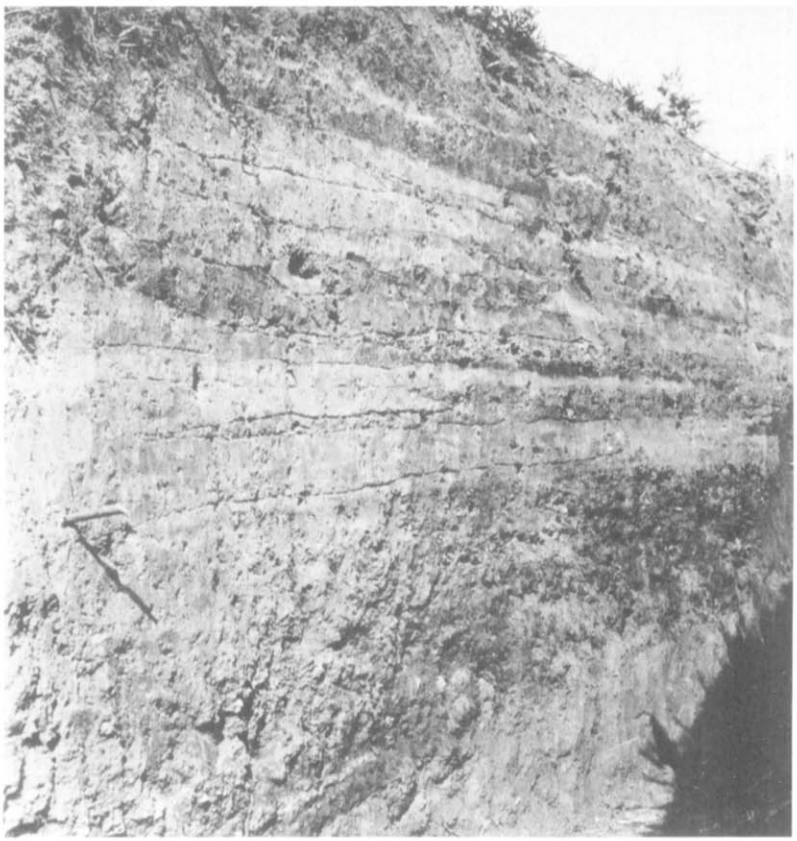
1.　帯隈山を西南より望む　　陸上自衛隊提供

2.　大清兵衛山南の外郭線　　南方より望む

1.　第１調査区を南方より望む

2.　大清兵衛山（第２調査区）の外郭線　　西南より望む

図版第四



上・第二調査区　土塁断面

下・第三調査区　土塁断面

図版第五

1.　第３調査区の東部外郭線

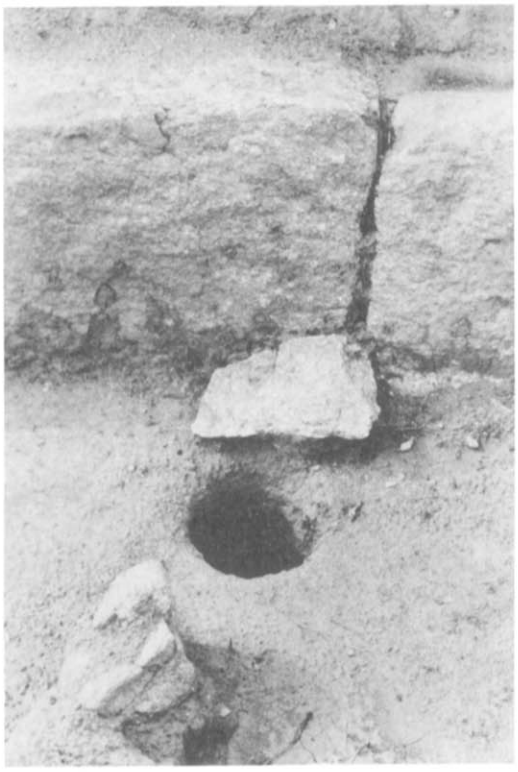
2.　第３調査区の東端土塁と列石、柵列

一、第四調査区の列石と柱穴、添石　北より望む

二、同所を南より望む

図版第六

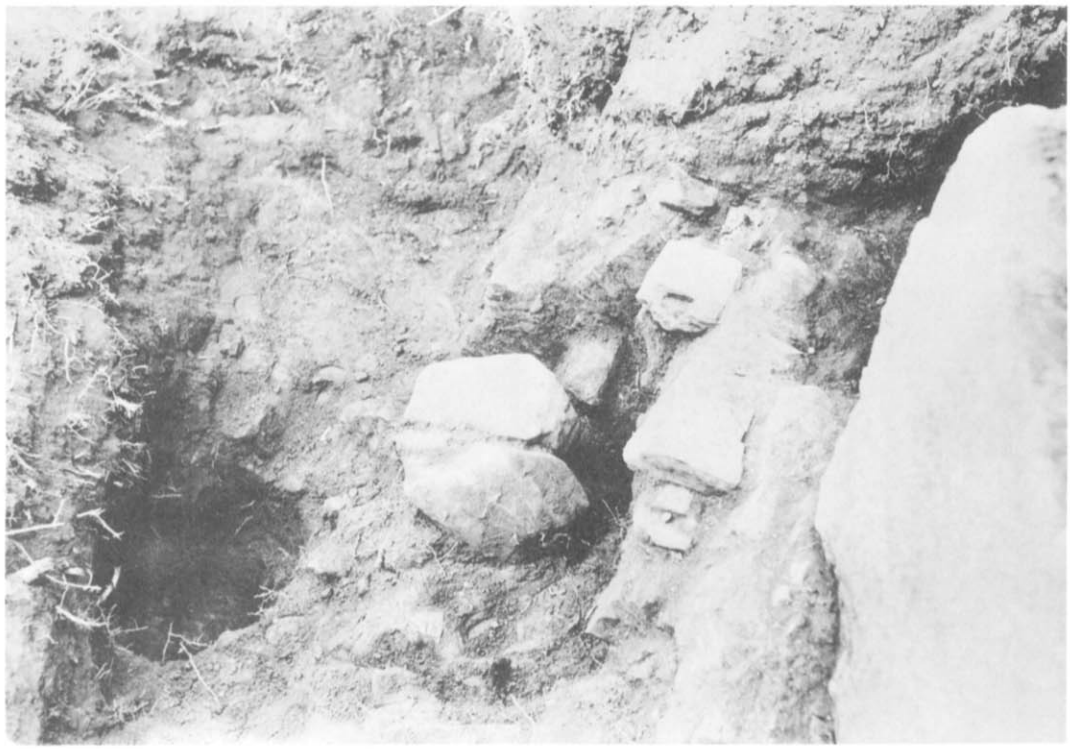
図版第七



柱穴と添石　（第3調査区）

図版第八

1.　第１調査区の土塁と移動した列石



2.　第２調査区の柱穴

図版第九

1.　北門趾を東より見る

2.　北門趾を西より見る